手工レースについて

神田美年子

一、緒
二、起　源
三、歴史と發達
四、名稱・系譜・分類
五、圖案とその變遷
六、現況及び將來性
七、結　び

一　緒

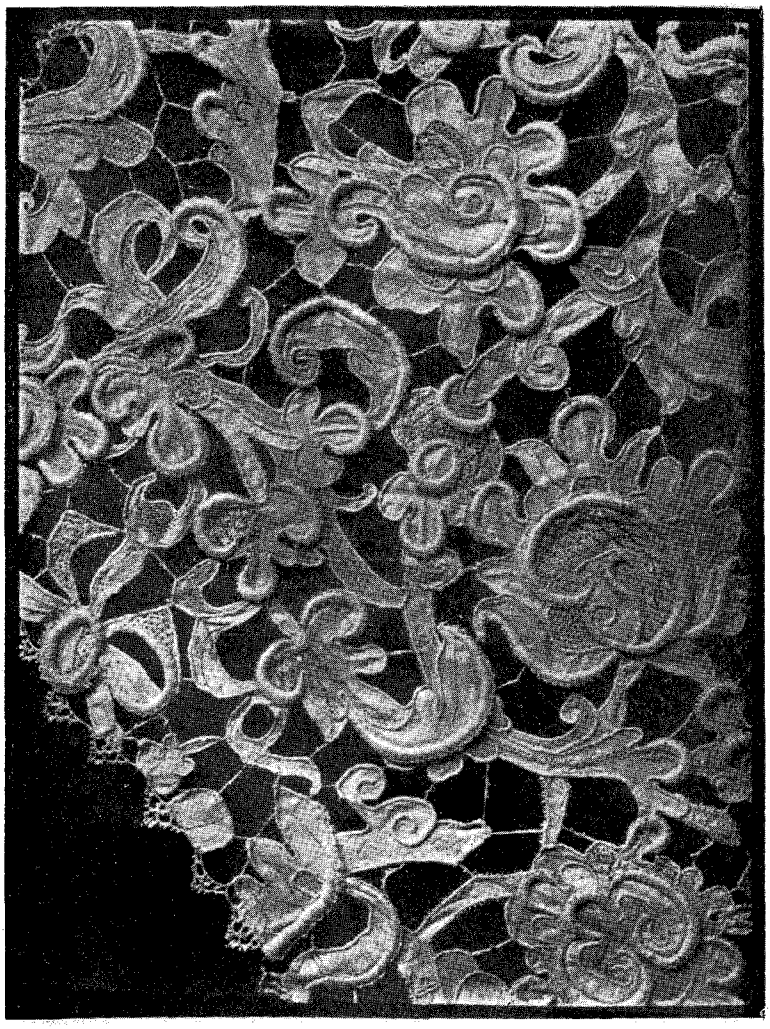
一九五三年の春季號アメリカン・フアブリック誌に「ラベンデルの要らなくなつたレース」と言う標題でレースの記事が掲載された。

ラベンデルというのは南ヨーロッパを主とした地中海沿岸が原産地で、この植物の枝葉や花は芳香を有してい

るので、これを干して防虫劑として衣類の保存に用いられていた。そこで「ラベンデルの要らなくなつたレース」とは、即ち平素藏い込んでいて特殊な時にのみ使うという極めて用途面の限定されていた昔の習慣から解放されて、現在では用途面の廣い日常着となつて來たことを意味しているのである。

その昔文豪ラスキンが「レースは時間と勞力を超越した最高の手藝品である。」と評した如く、嘗ては一枚のテーブル掛を作るのに數百人の人手を要し、その價格は數千金を下らないというのも稀ではなかつた。それだけにレースの歴史は色々の出來事を祕めている。

英國では一時レースの流行が派手になつたので時の政府は國民浪費を憂え、男爵以下の身分にはレースを纏うことを禁じた。又レースの技術者が國外へ出ることを嚴禁した國もある。後世に於てもレース機械の輸出は流刑や死刑を以て罰せられた事實等から察しても如何にレースが限られた社會にのみ用いられ、大切がられていたかが想像出來るのである。ところが前述のファブリック誌に掲載された記事の如く、現代に至つては機械工業の發達と共にその生産も容易となり、レースの持つ美しさへの魅惑は現代人の憧れとなつて、服飾界への進出は目覺しいものとなつた。そしてレースが長い傳統の衣に被われ、ロマンスに包まれていた障壁は今や破れんとしているのである。彼の絢爛華麗な服飾界にとつて忘れることの出來ないルイ十四世時代は正しくレースのつくつた黄金時代であつて、今又その再出現かと思われる程の此の頃に當つて、レースについての智識を博め度いと思い、その起源、歴史と發達、名稱、系譜、分類、圖案等を調べ、更に服飾デザイン、用途、取扱上の諸問題についても些か所見を述べて見たが紙數の都合で後半は割愛することにした。



ローズ・ポイントレース（ニードル・ポイントレース）
（ドレストリミングの一部）

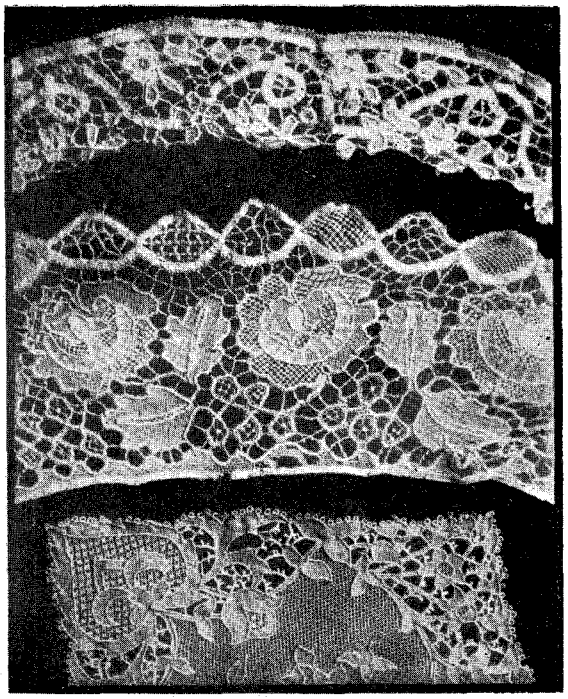
第　1　圖

ドローン ウアーク

第 2 圖

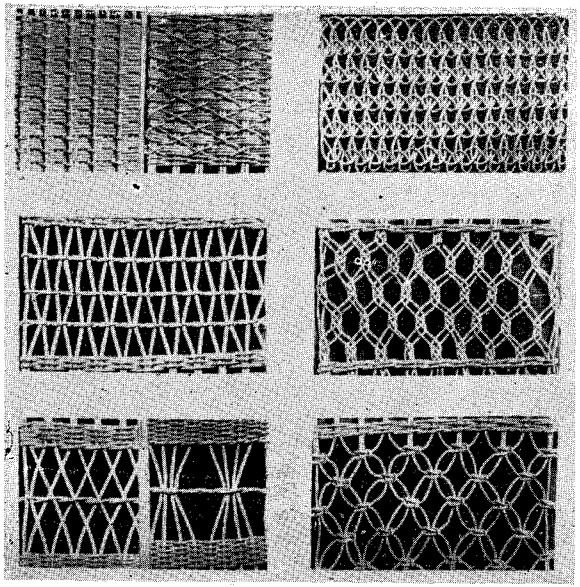
ボビンネット（チユール）の繍刺レース

第 4 圖



早期のアイリツシニードル・ポイントレース

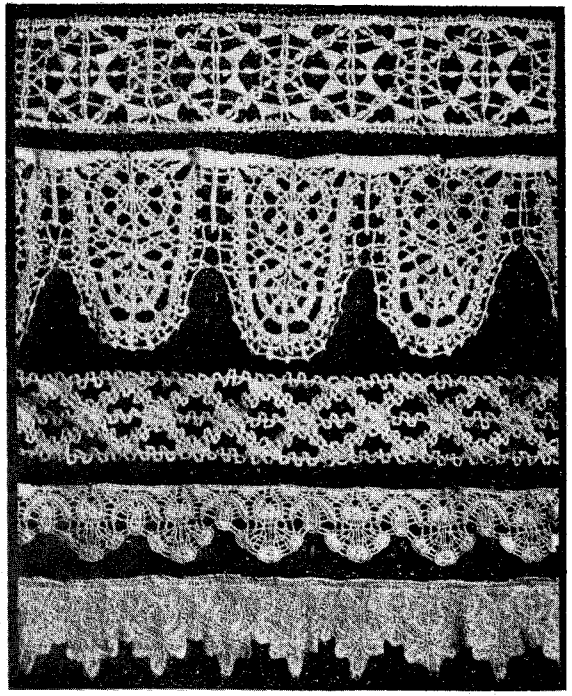
第 3 圖



莫　編
(あけび細工)

綬　編　法　螺　編
三本中の編　ア　ビ　編
瓢箪透し編　編　透　し

第　6　圖



ボビンレース
1. レチシラ型
2. プレーテツドレース (バンダイク型)
3. プレーテツドレース (簡單なもの)
4.5. 16世紀のイタリヤのボビンレース

第　5　圖

二　起　源

レースの起源は刺繍レースから始まり、縫針による針加工（Needle work）から發達したものらしい。

刺繍（Embroidery）という言葉の語源がアラビヤ語以外にないことや、彼地の古墳の發掘物等から想像して刺繍の技は太古から埃及、シリヤ、バビロニヤ、ギリシヤ等に行われ、專ら暖帶若しくは熱帶地方にその用途が多かつたように傳えられている。抑々刺繍がどうして始められたかと云うと、被服が古くなり傷むにつれてその補修をするのに成可く美しくしようと次第に努力したことから始まつたと云われている。又刺繍は完全な審美的裝飾本能より生まれたものであるとも云われているが筆者は前の說の方が正しいように思う。この理由として、古くから北歐のエスキモー及びその隣接の二、三の種族やスイス等に於いて刺繍は行われていた。史前時代のものでスイスの湖上村居住民の遺品には亞麻糸で刺繍された織物の一片が發見されている。又アイヌの厚司の刺子も一種の刺繍と見ると、補修より發展したものと見るべきであろう。この理由づけにはキルティングを說明するとよく判ることと思うが、これは遠く中世の騎士たちがその固い甲冑の下に着て、軟い感觸の着心地と冑づれを防ぎ、保溫を兼ねるため女の人が刺子のようにして作つた。これがインド、ペルシャ等東方諸國の圖案樣式の影響を受けて裝飾的に發達し、十七世紀に最も多く用いられた。キルティングの發生は以上で知られるように明らかに保溫と外傷を防ぐ實用性から出發したものでこれが次第に裝飾化して行つたのである。又一說に太古原始人たちは衣服に野の草やかづらなどをつけて飾りとしたのであるが、後に縫針で糸を縫いつけて布地に模樣を固定

したことが刺繍の始まりであるとも云われているが筆者は刺子の方が正しいように思う。以上述べた如く刺子と刺繍レースは大體に於いて、古く北方にても行われていたのである。

三　歴史と發達

中世紀には伊太利の修道院で尼僧が教會用の裝飾布や聖壇の覆等を時間と勞力を超越して作つていたのであるが、それは教會の内部での生産であり需要であつて、一般には公開されていなかつた。當時は僧侶の地位は最も高い文化的知的階級にあつた。

一四五〇年頃、始めてこれらの僧侶によつて一般の人々にレースの作り方が教えられた。以後レース作りはむしろ下級社會の人々の間に行われていたがそれらの人々が追われて他國に行きレースを教えたものと思われる。即ち避難民が主にレースを教えたものである。（第5圖の1參照）

十六世紀から十七世紀にかけてはレチシラと稱される縢紋の綴合せたレースが袖口のカフスや帽子等に盛んに用いられた。その頃ベニスではニードル・ポイント・レース（第5圖4・5）が一般に認められ、僅か一世紀の間に非常な勢力を占めた。今でもヴェネチヤの美術學校には襟に純白のレースをつけた婦人畫像（一五〇〇年作）が殘つて居り、又コレル博物館には一五一五年作のカルパチョの畫にレースで飾つた服裝が画かれている。當時ヴェネチヤは西歐と東洋を結ぶ貿易都市であつたためこのように文化が發達したのであろう。

一方ピロー・レースはミラノやジェノア地方を中心に大いに發達した。その後エーゲ海のマルタ、キプロス、

シシリー諸島に傳わり地中海を經て西班牙に至り、ジェノアから佛へ、ヴェニスから獨へ更にベルギーを經て英國へと傳わつて行つた。

十七世紀にはネーデルランド（今のオランダやベルギー）ではピロー・レースが發達し、佛のニードル・ポイントと共に盛んであつた。殊にフランスでは十六世紀頃から皇室に於けるレースの流行は非常に盛んで襟・袖口飾りから靴飾りに至るまで利用され、十七世紀に至つては頂點に達した。卽ちこれが有名なルイ十四世の時代である。そこで政府は國民の浪費を憂えて一六六〇年外國レースの使用禁止令を出したが密輸が盛んに行われ、流行は益々烈しくなるので政府は遂にこの高價なベネシャン・レースやフランダー*・レース等を燒いてしまつた。然し人心はこれに反してレースに對する愛好心が强くなるばかりなので、時の首相コルベールがレースの國內生產によつて外國品の輸入を押えんとして、一六六五年にベニスのレース製造者を教授に招いて官營のレース製造所を設立した。その後十年に亘つて政府の專賣事業として續けられた結果、ベネシャン・ポイントを凌ぐ程の立派なものが出來た。ルイ十四世はこれをポワン・ド・フラン（Point de France）と命名された。このレースは伊太利のレース界を制壓するに至り、以後佛のレース工業は次第に發達して行つたがフランス革命によつて滅亡し、亡命者は英獨に渡つてこの技法を教えたのである。

ベルギーに於けるレースの最盛期はやはりこの十七世紀で婦人の大部分がこの仕事に從事していた。當時西部フランダースには百八十の作業場と四百の學校があつた。又その技術も精巧を極めていたので各國が競うて技術者を招聘しようとしたので一六九八年に法令を以て製造者の他國派遣を嚴禁した。

十八世紀に入るとベルギー領のブラバン地方でもレースが盛んに作り出され、遂にこれをオランダ方面に賣出すようになつた。ブラッセル・レースはこのところ最高潮に達し、英國に於てはジョージ第一世頃、婦人がブラッセル・レースの首飾り、帽子、胸衣、ハンカチーフ等を盛んに用いた。又レースの流行につれて自然に絹織物のオープン・ワークが研究され、遂にクロッシェ及びメリヤス編レース等が生れた。

十九世紀に至つてレース機械の出現するに及び人間至上の藝術とされていた手工レースは漸次影をひそめるようになつた。只フランスのシャンテリーで作られた黑い絹のレースはルイ・フイリップ時代同國で流行を極め、それがスペインへ、更に南米諸國にまで波及して婦人のマンティリアとして盛んに用いられた。

レースの機械生産は既に一五六一年にドイツの一婦人によつて試みられていたが、それから二世紀後の一七五八年に至つて英國のノッチンガム（今でも世界のレース機械の中心地）で靴下編機からなるレース機が創作された。一八〇八年ボビネット機が發明されて、これがリーバース機の先驅となつた。一八一三年リーバース兄弟によつて手編と余り變らない機械編レースが作られ、一八三七年には見事にフアンシー・レースの出發點となる立派な機械が考案された。その後改善され、洗練せられて今日に及んでいる。レースの製造は今尙フランスの一大工業の一つであつて、フランス人が特別の誇りをもつものである。

アメリカ合衆國に於ては遙かに遲れて出發した。卽ちアメリカ人の國民性には時間と勞力を厭わぬような手工藝品には余り關心が持てなかつた故でもあろうが、一八八五年英國よりレース機械が輸入され、始めて機械レースの製造が始められたのである。

我が國に於けるレースの始まりは明治初年に在留外人が敎えたのが始めてであるかのように云われているが、その始めりは遠く天翔ける羽衣の傳說に想いを至すべきであろう。我々は羽衣とは今のナイロンのスカーフのようなものを思い出し、又事實繪にはそのように畫いてあることが多い。然し羽衣とは未開民族間に羽衣として外衣に應用したもので、羽衣は雨露を凌ぎ、輕いことゝ保證のための重要な衣であり、又これか蓑の始まりとも云われている。又裝飾品としても用いられた。我が國でも蓑の下に網をかけて着心地のよいようにしたもので、そのためメッシュ又はレース目の思想は古くからあつたと思われる。又竹籠やあけび細工は古くから作ると云わずに編むと云う言葉で表現されているが、卽ちレース目を用いたものであつて我が國でもメッシュ（Mesh）の重要なものである。（第6圖參照）又江戸時代の紙の普及化は厚い木紙を直接縫合せて紙子とし、襦袢などに盛んに用いられた。この縫方は七寶繋ぎの編方と云い、全體がレースで所々にメッシュの大きい所や組織を變えて模樣にしている。又エンブロイダリー・レースの始まりかと考えられる刺子は衣服の修理に用いられた。これが後になり、わざ〳〵穴を開けて縢り、この穴の數や縢る數によつてレースの優劣の一端ともなるようになつたと云われている。このようにして我が國には歐州諸國のように精巧緻密な美術工藝品と云われる程のものはなかつたが古くからレース組織と思われるものは存していたのである。

然しレースと呼ばれるものは明治初年、在留外人が日本女子の指先きの器用なのと、工賃の安い點に着眼して敎えたのが始まりで、その後ドロン・ウアークやカット・ウアークを海外へ輸出するようになつた。日本人の先驅者は新潟縣の人で越後の高田にレース製造所を起してバテン・レースを專ら輸出用として作つた。富山縣下

では三十年も昔から海岸地方の町や村で主婦の内職としてレースを作つているが、これは漁網手結（テスキ）を古くからやつていた技術を生かしたものである。集配に便利な點で神奈川縣が最も盛んで、これに次いで新潟・靜岡・東京・埼玉・長野・富山・福井の順に榮えた。製品の種類も次第に增えてバテン・レース、ドロン・ウアーク、カット・ウアーク、クロシェ、フィレー、ピロー、テネリーフ、モザイク、ホニトン、トーション等の各種に及んだが殆んどが米國への輸出であつた。

爾來我が國の服飾にはレースは餘り用いられなかつたが、明治から大正の初めにかけて鹿鳴館を中心とした社交界では上流婦人の間に洋服が愛用されはじめたので、政府は英國婦人を招いてレース學校を創立した。これが日本でのレース學校の始まりである。

＊　フランダー（Flanders）は中世期に歐洲西部にあつた國で、現在のベルギーの東フランダース、西フランダースと、それに隣接するフランス北部とオランダ西部を含む地方。

四　名稱、系譜、分類

名稱

レースの名稱は正確な基礎がなく、大部分は產地の名を附して同種のレースの區別をした。卽ち九〇％位は土地名又は都市名であろう。その他人名、組織、材料、用途、柄合、製品の大きさ、仕上、形、作業工具等で名付けられ、又、或種のレースをまとめて呼ぶ總稱等があるこれらの一例を擧げて見ると、

土地　アランソン・レース
國　エジプテイアン・レース
人　リバー・レース
組織　マクラメ・レース
材料　スレッド・レース
シェニル・レース
シルバー・レース
ファイバー・レース
用途　インサーション・レース
柄合　ジヤカード・レース
製品の大きさ　ナロー・レース
仕上　バーンアウト・レース
作業工具　ボーン・レース
總稱　アヴェ・マリア・レース
スパニッシュ・レース
形　コンパス・レース
モザイク・レース

等がある。依つてこれ等を詳細に研究するときはレースが何時代のもので且、何レースなるかは容易に識別することが出來る便利はあるが、産地名の名稱を冠するときには種々の不都合を生ずる場合もある。即ち初めはエンブロイダー・レースのものが時代を經るとその名がボビン・レースを示し、後にはニードル・ポイント・レースを指すことがある。このような時は分類上非常に困ることになる。又同一の名稱のものにも種々の組織がある。例えばブラッセルと稱せられているレースには、ポイント・レースとボビン・レースの二種がある。更に同じレースであつても他の國で、或は別の時代に作られたものは自國産と同一のレースではないという趣旨の規定が成立する程である。例えて云うとアメリカ合衆國では支那で作られたヴァレンシアンヌ・レースは完全に同じに作つて、而もベルギーから輸入した糸を使つて作つたものであつても殆んどヴァレンシアンヌとしては通用しない。フランスではルイ十四世の時代に首相コルベールがレース工業に力を注いだ結果、實に精巧な Gros Point de Venice が出來たがルイ十四世はこれをポイント・コルベールと命名された。それは他國でこのレースを製造することをベニスの法律が禁じていたからである。以上レースの名は主にその發生地の名を冠していたがレースの創造者が無名である如く、作られた場所も無名であつても然るべきであろうと思う。ヴァレンシアンヌは何處の國で誰が作ろうとヴァレンシアンヌであるのであるし、事實ヴァレンシアンヌの都市すらが歴史上再三國籍が變つている。依つてレースの名稱も製造法とか或は獨自の性格・特徴等によつて新しい名稱が與えられることが望ましい。このようにすれば多くの混同も正されて分類上非常に樂になる。更に誤解を招くような、或は間違つているようなレースの名稱は廢止するべきである。長い間の傳統と習慣を打破して改稱するということは何事

に於ても實にむづかしいことではあるが、事實名稱と傳統とがレースを研究する者を迷わせている。

本來レースと云う言葉自體が混亂の源をなすもので、我々が使つているレースという語は英語の Lace であつて、これは古フランス語の Laz から出ており、古くはラシ (Lacis, Lassis) と云われ、その元はラテン語の Laques 即ち「輪索」からきている。昔はレースという言葉は靴紐だとか、コルセットの紐とかの場合に使う紐の意に用いられた。昔のレースという言葉の使い方ではそれが果して現在我々が使つている意味のレースであるか否かはつきりしないのである。要するにレースの名稱はもつと系統だつた組織だつたものにする必要は大いにあるが、そうかと云つてヴィタミンのようにA・B・C・Dと名付けることには反對である。兎も角もレースに於てはレースとその名の都市又は國とは切離して考えるようにした方がよい。即ち單にその名は發生地として考えるか、又は全然その意味を無視することである。我々の姓名にも色々の謂れがあり、意味を含んでいたかも知れないが「神田」と云えば神の田を意味するのではなく現在では單なる符號と思うのと同一である。

系　譜

レースの年代的變遷、分枝等を調べるには人間の家系と同じように取扱うのが便利である。そのためこゝでレースの系譜と題して置いた。

レースの古い系統は次の三つに分けられる。

1　ニードル・ポイント・レース

2　ピロー・レース

3　裝飾ネット

これらの系譜を表にすると第一表となる。

一、ニードル・ポイント・レース

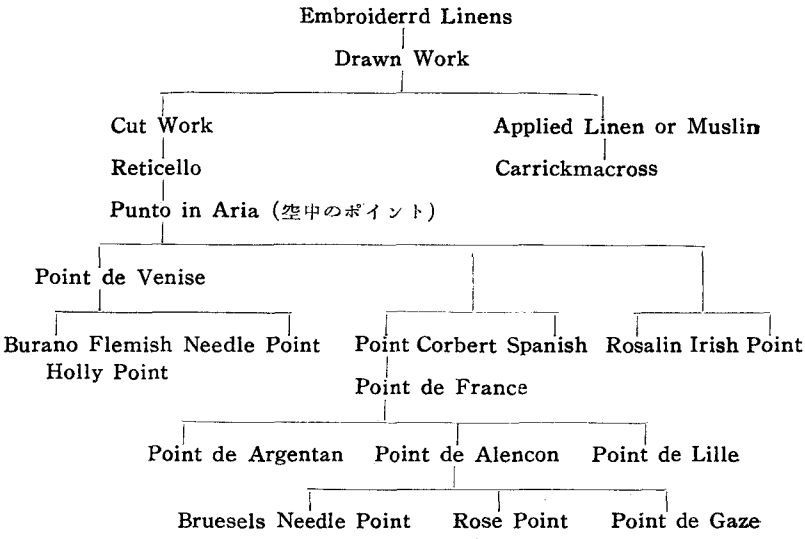
このレースは中世紀のエンブロイダリーの直接の子孫である。常識的に考えてもそれらの手工法が非常によく似ていることからも判る。始めは刺繍のみをしていたがその後若干の糸を引き抜いてその隙間をニードルで縢ることが始まつた。これがドロン・ウアークである。（第2圖參照）その内一層大膽にリネン生地に幾つかの孔を切り開けて手の込んだステッチで埋めるカット・ウアークが始まつた。間もなく廣い隙間に糸を渡して幾何模様を描き出しレチシラ（第5圖の1參照）を作り出した。次には飛躍的な考え方が生れて布を全く用いないでパターン紙（羊皮紙）上の模様に添つて糸を配し、これを縢つて作つたもので基礎布のないところから Punto in Aria, Point in the air という。これが所謂ニードル・ポイントの母である。これよりレースの裝飾美と云うものは一段と映えるようになつた。一方刺繍レースよりニードル・ポイント・レースにならずにそのまゝ發達したのがキヤリック・マクロス・レースである。

二、ピロー・レース

これは十六世紀に伊太利とベルギーで發達し、降つて十七世紀になるとピロー・レースは二つのグループに分れた。即ち分離式と連續式である。分離式とは部分的にパターンを作り、それらの部分のパターンを模様に應じて縫合せてレースとするのであつて、連續式とは連續した糸で作るレースである。

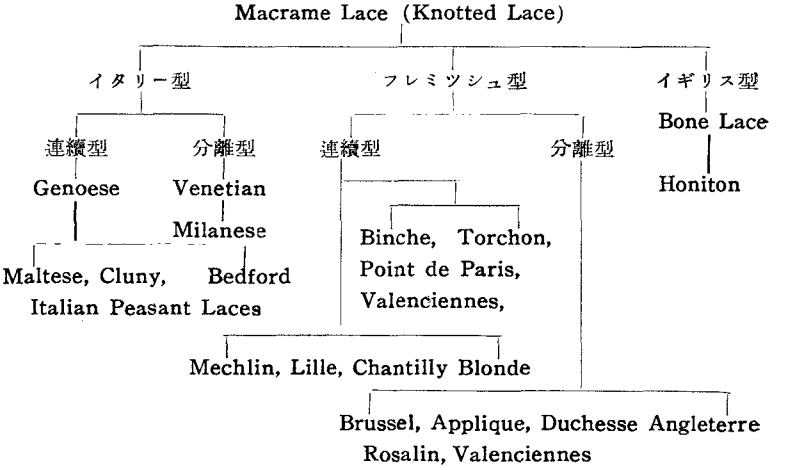
第 一 表 (1)

Needle Point Lace の系譜



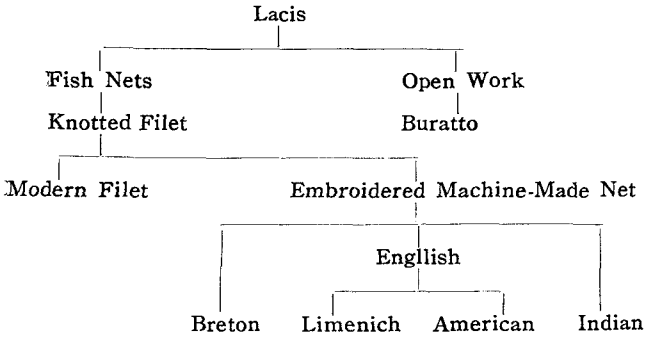
第 一 表 (2)

Pillow Lace の系譜



第一表 (3)

Decorated Net の系譜



三、裝飾用ネット

漁網よりレースに變化したもので主にイタリ、ギリシヤの海岸地帶でよく作られた。これは他のレース程進歩しなかつたがその後機械レースにより再び種々の型を得るに至つた。一方進取的な作業者は織機で粗いメッシュの織物を織り、ニードルで作つたフィレー・レースやブラトーレースを創造した。

分類

筆者は種々のレースを呼ぶときに、そのレースが分類上どの位置にあつて、どのように分類されているかが非常に判り難く、又今迄餘り書物にも書いてないので、これを明らかにすることは大いに價値のあることゝ考えて以下のように行つた。

レースの分類は非常に面倒である。それは手工的な方法では種々の組織のものが得られて複雜であるし、又レースを作るとき、

1、ステッチ (stitch, mesh, net, ground, work, punto, point de, point, resean) を表わしているか、そのステッチがそのまゝレースを表わしているかが先づ判りにくい。

2、ある時代のある所のもののみの名稱もある。例えばアランソン・レースとは十七・八世紀のフランスの都市アランソンで作られたレースであつてそのときのもののみの名稱である。

3、或都市名のついたレースでも時代によりそのレースが組織的に變化して種々のレースを指すことがある。

4、同じレースでも時代と場所によつて名稱が種々異つている場合もある。

5、種々の書物を見ても組織的にどのようなものか書いてないことがある。

6、昔のレースは時代を經るに從つて少しは誤つて傳えられているようである。即ち種々の本にて說明が異なることがある。これは手工レースの複雜さというか、或は類似性を持つか等の點から來ていると思われる。

さてレースを分類するには組織的に分けることが一番適當なように思われる。その他形、用途等で分けることも出來るが、先づ組織的に分類するにはレースの定義から出發しなければならない。その定義は十分ではないが次のように云うことが出來る。

「糸の撚合せ、組合せなどによつて透し模樣の布帛製品としたもの」

手工レースを分類すると第2表となる。即ちレースは一般に狹義（眞のレース）のものと廣義（模造レース）のものと二つあつて、專門家以外は廣義のレースを定義している。又刺繡レースはその機械がリバー・レース等とよく似ているので專門家でも無斷に便宜上狹義のレースに入れることが多い。廣義のレース即ち、織生地を基礎として之に針加工を施して一種の透し刺繡と成した布帛レース（Fabric Lace）と、糸自體から成る狹義のレース即ち糸製レース（Thread Lace）とに大別出來る。更に夫々を細別することが出來る。（第二表の(1)・(2)・(3)・

第二表

- Hand Lace
  - Fabric lace
    - Darned netting
    - Open work
      - Drawn work
        - Dresden point lace (地)
        - Nancy lace (地)
      - Cut work
        - Saxony lace
    - Reticella (Roman lace) Greek lace
    - Embrordery lace (1)
  - Thread lace
    - 眞のレース
      - Needle point lace (2)
      - Bobbin or Pillow lace
        - Plated Lace (3)
        - Pillow Lace (4)
    - 模造レース
      - Knotted lace, Macrame
      - Knitted lace or Crochet
      - Tatting lace
      - Teneriffe lace

(4)参照)

布帛レース

◎ダーンド・ネッティンダ

最初結網(Knotted net)を作り、其方形目を織縢で埋めて、模様としたもので古くから聖壇のカバー等に利用されていた。

◎オープン・ワーク

リネン地、其の他の織地を基とし、之に下繪を案内として透目針加工を行つた布製レースで刺繍レースの一種である。これをドロン・ウアークとカット・ウアークの二つに別けている。

◎レチシラ

カット・ドロン・ウアークの一段と進化したものでニードル・ポイント・レースの前身である。(系譜ニードル・・ポイントの項参照)

◎刺繍レース

(2) Needle Point Lace

Point de France	
Point de Alencon	(地)
Point de Argentan	
Point de Brussls	(地)
Spanish Point	
Arabian Lace	(地)
Chenille 〃	(材)
Carnival 〃	(用)
Point de gaze	(材)
Point de Paris	(地)
Renaissence Lace	(地)
Rose Point 〃	
Burano 〃	(地)
Youghal 〃	(地)

(1) Embroidery Lace

(括孤内は名稱分類を意味する)

Artificial Lace	
Carrickmacross 〃	
Cornelly 〃	
Nottingham 〃	(地)
Plauen 〃	(地)
Irish crochet 〃	(地)
Run	
Saxony 〃	
Burn out 〃	
Margot 〃	
Tambour 〃	
Guipure 〃	
Saint gale 〃	(地)

(3) Plated Lace

Swedish Lace	(地)
Genoa 〃	(地)
Batten 〃	(地)
Battenberg 〃	(地)
Braid Lace	(材)
Peasant 〃	(形)
Barmen 〃	(地)

(4) Pillow Lace

分離型

Brussels Lace	
Honiton 〃	
Milanese 〃	
Bruges 〃	
Rosalin 〃	
Application 〃	
Duchese 〃	

連續型

Torchon Lace	(地)
Maltese 〃	(地)
Cluny 〃	
Valencienes 〃	
Point de Paris	(地)
Point de Lille	
Binche Lace	(地)
Chantilly 〃	
Buckingham 〃	(地)
Malines 〃 (Machlin)	
Blonde 〃	
Antwerp 〃	(地)
Crete 〃	
Cane 〃	(地)
Northcempton 〃	(地)
Princess 〃	(形)
Flemish 〃 (Flanders lace)	(地)
Bavaria 〃	(〃)
Bohemian 〃	(〃)

透孔刺繍地布レース（ファブリック・レース以外のもの）で最も古い布帛加工でその範圍も極めて廣い。

糸製レース

眞のレース

◎ニードル・ポイント・レース

ボビンを使わずに一本の針加工による糸製手工滕レースの總稱で、糸足の纏絡によつて透し地を作り、それに模様滕を配したもので、始めベニスに發達し、後、佛のアランソン地方に模造された。ベルギーのブラッセルが中心地となり發達した。多くの種類があるが中でもベネシャン・ポイント、ブラッセル・ポイント、アランソン・ポイント等が有名である。

◎ピロー・レース

ピロー上にて數本のボビン糸の操作によつて作られたレースの總稱である。枕上に配された多くの糸端のもつれを防ぐ目的で、各々の糸を卷く小型のボビンが發明されたのでボビン・レース（Bobbin Lace）又はボーン・レース（Bone Lace）とも云われている。ボーン・レースとはそのボビンが骨で作られているのでこの名がある。

◎プレーテッド・レース（第5の2・3參照）

早期のピロー・レースで中世紀ジェノア等で盛んに行われた絹糸、或は金銀糸の組合せレースのことである。ジェノア・レースの別名がある。又レースの主體が糸のプレーティングから成る凡てのレースを云う。

模造レース

◎マクラメ・レース

「マクラメ」と云う語はアラビヤ語で、縁飾の總の意である。ピロー・レースの源であるとも云われている。このレースの作り方は、コード又は布の端に糸を輪掛して必要な本數だけの糸を總狀に下げて、順次に糸を釦穴縢、又は平結、銷結、寄結等で結び合せて結糸布帛と成す。最初は寺院の飾りとか僧服の飾りとして用いられたが後に室内裝飾や袋物などに應用された。

◎ニッテッド・レース

一般編物の應用で、ニッテッド・レースとは棒針編レースを指し、鈎針編レース卽ちクロシエのことである。又アイリッシュ・ポイントもこれである。（第3圖參照）

◎タッチング・レース

結び輪縢を綴合せた一種の結びレースでシミナル・レースに似ている。シヤットル（shuttles）と呼ばれる特殊な器具に糸を卷いて輪縢りする縁飾等に廣く用いられる。

◎テネリーフ・レース

カナリア群島のテネリーフ島に出來た車輪型模様を配した糸製レースで、丸型であると日輪レース（Sun Lace）又は（Brazilian Sols）と云う。

五　圖案とその變遷

レースの美しさの根底はデザインの如何にあると云つても過言ではない。使用した糸が立派であり、如何に手際よく出來ていても、圖案が貧弱であつたならそのレースは見劣りがする。レースの模様ははつきりした線と、釣合がよくとれている事が大切であるが、更に奔放な創作力と優れた感覺がなくてはならぬ。人間がレースに努力したのは纖細な網目細工の羊齒の葉より最切にインスピレーションを與えたからだと云われているが、時にはインスピレーションも手傳うことであろう。さてデザインの歴史的變遷を大別すると六つの部分、傾向になる。

1、メデアヴル型（一五五〇年前後）

このときは數字、徽章、怪物、想像的動物、草花、渦卷等の象徴的圖案であり、太古の繪などとよく似ている。

2、幾何學型（一五五〇―一六二〇年）

この圖案は三角形、菱形、圓形、扇面形等の組合せのものが多く、時にはサラセン的感覺のあるものもあり、時にゴシック風のものもあつた。

3、ルネッサンス型（一六二〇―一七二〇年）

十六、七世紀はデザインは幾何學的模様が多く、自然的の形狀も純粹な幾何學的線で表現されている。この圖案は十五世紀、伊太利に流行した架空的な花鳥、人物、樂器、蝶、渦卷等の起伏せる模様で中でも渦卷模様は豐かな丹念なものであるが、これらを構成している基本的な線は極めて近代感覺をもつている。十七、八世紀にな

るとレースは一段と丹精を凝うした工藝品となり、その種類も急速に移り變つて行つた。

4、ロココ型（一七二〇—一七七〇年）

この模様はルネッサンス型の優雅なるに對し、極めて硬く角つた型で、圖案が濃厚で花や花束等をごちやごちやと無意味に集めたもので對照法が考慮された。この時代からレースは下火となつた。

5、點線型（一七七〇—一八一〇年）

模様が極めて小型で、主に建築模様を變化して混用したもの等である。

6、寫實型（一八〇〇—現在）

十九世紀には總ての圖が寫實的となつた。そして機械生産にて始めの内は手工の模様を模倣していたが次第に近代感覺を盛り込んで精巧になり、圖案は花、葉及びそれらを變形したもので、大體に於いて圓又はそれに近い曲線を多く用いている。元來レースには圓形は最も無難な柄で、レースのデザインに花模様が多く使われているのは花が圓形又は卵形であるので花の形の流れるような曲線はレースに容易にマッチさせることが出來るからである。商業主義的生産では餘り突飛な柄は出しにくいように思われる。

今、レースのデザインを全體的に眺めて見ると宗教的な、又は傳統的な定りきつた從來からの傳統から漸次製作者の嗜好などを取入れた個人主義な自由な取扱いへと移つて行つたのである。

手工の昔の刺繍は鄕土的民藝的な形態を持つていて、豪華な貴族的趣味に適合していたとも云える。それがエンプロイダリー・レース機の出現と共に鄕土的なものでなくなり貴族趣味から脱しつゝあるのである。

要するに美術には精神乃至、思想と技術が必要であつて、日本の手工的刺繍は技術のみを重んじ、繪畫的であり、徒らに繪具の代用として使用されている點等大いに考うべきである。

又今後のレースのデザインに大きな興味を持つものである。

六　現況及び將來性

現在レースの主な生産國はベルギー、フランス、イタリー、イギリス等の順位であるが、ベルギーは今尙政府がレースについての關心深く、小學校の基礎教育にまでレースを取入れて輸出を盛んに奬勵し、國をあげてその生産に勵んでいる。フランスはパリーを中心として今でも高價なレースが集まつて來る。中には幾人かの人が三年間もかゝつてやつと出來上るようなハンカチー一枚が一千フランもするというようなことも聞く、イタリーは古い歴史を持ちながら生産額は前者に劣るがデザインでははるかに優れているし、今でもベニスの附近には特殊なレース學校がある。イギリスに於てもレモレックレース、ホニトンレースが生産せられている。

アメリカ合衆國には現在七十六のレース工場と百三十七臺のリバーレース機があつて約一萬人の從業者が働いており、年額三千五百萬弗の生産をあげている。この様にヨーロッパで發生したレース工業は今やアメリカに於て確立せられんとしている。

日本に於ても近時洋服の普及化に伴い、その需要は頗る多く、レース專門の會社を始め、大紡績會社にも幾臺かのレース機械が備えられ、技術面の方向も著しく進み、スイス、イタリー、英國等の一流國に迫つて、その生

産は年と共に發達している。一方手工レースに於ても今尙婦人の副業として續けられ、これらは東南アジア、中南米、インドネシヤ等へ盛んに輸出されて、日本の經濟界に大きな貢獻をしているのである。

斯樣に時代の推移はすべてを機械化に導いて行く。そして品物は多量に生産され、コストは自ら下つて商品化して行く。嘗つては高貴の人々の獨占的所有物であつたレースが一般人にも容易く手がとゞくようになつて來た。最近化學纖維の進歩發達はレースの持つ美しさに更に加えて耐久力を與え、裝飾用から實用性の高いものに改良されて來た。ナイロンの登場がそれである。今、アメリカのデザイナー達は口を揃えてナイロンレースを讃美し、推奬している。次いで他の合成纖維のレースも成巧し、その用途面は一日々々と擴げられて行きつゝあり、服飾界にも新しい歴史の頁が繰り擴げられようとしていることは我々の大いに期待するところである。

一方、手工レースの價値は機械レースの進出に從つてその價値は益々高められ骨董品のように珍重がられている。歐洲各國では今尙最高の藝術品として、親から子へ、子から孫へと祖先傳來のものを傳えて誇とする習慣がある。これは丁度我が國の主婦が古くから家寶とされている什器等を以て客を歡待するのと同じであつて、これらの習慣が最も盛んに行われている地方は大西洋上の新島キヤナリー島（スペイン領）と南支の汕頭である。

七　結　び

本報文中、歴史と發達などは今迄の書物によく書いてあるので簡單にまとめた。

名稱、系譜、分類は他の書物にも餘りないので、レースの生い立や、位置を明かにした。それと共にレースの

デザインの變遷等も出來るだけ詳しく調べたが、未だ系譜との連絡がなく、今後の研究に俟つことが多い。

名稱については數の多いことに先づ驚いた。而も實に複雜でその分類は容易なことではない。もつと組織だつたものに改められることを望むけれど、レースの持つ美しさや、歷史等は成可くこわされぬようにとしたいものである。

附

尙レースに關しては辭書的な本は澤山あるが系統だつたものは少い。本文にも誤つたところがあるかも分らないが讀者諸賢の御指導を頂き度い。

最後に各レースの說明は紙面の都合、又餘りにも敎科書的になるので省略したが、左記の書物に詳しく記されているから參照されたい。

堀越勇次郎著　レース工業

田中千代編著　圖解服飾事典

參考文獻

1　レース工業　堀越　勇次郎著

2　レース・モード　レース工業會編

3　圖解服飾事典　田中　千代編著

4　被服大事典　被服文化協會編

5・6　日本原始纖維工藝史　原始篇　士俗篇　杉山壽榮男著

7　製　麻　森　岡　一著

8 Learning about Lace, The Federation of lace and Embroidery Employers' Associations (英)
9 Lace and Lade-Making, Marian Voue (米)
10 Lace Making, Eunice Close (英)
11 Home Lace-Making, M. E. W. Milroy (英)
12 Embroidery and Tapestry Weaving, Mrs. A. H. Christie (英)
13 リビングデザイン (レース特集) 昭三〇・五月號
14 American Fabric 1953, 春季號
15 Seven Centuries of Lace Textile Fabrics, Mrs. John Hungerford Pollen
16 Textile Fabrics and their selection, Isabel B. Wingate (英)
17 旅 昭・二七・一〇 (經濟風土記) 川端木茂章八
18 American Fabrics 季刊4年回 (米)
19 Textiles Suisses (スイス)
20 Daily News Record (米)
21 Textile Weekly (英)
22 Service Chemical Fiber (英)
23 Fiber (英)
24 Women Wear Daily (スイス)

(本學講師 被服學)